

制定初期における宮崎市都市計画の特徴

宮崎市役所 正員 沼口一朗

宮崎大学工学部 正員 出口近士

宮崎大学工学部 正員 吉武哲信

(1)はじめに

昭和初期、宮崎県の宮崎・都城・延岡では人口増加による衛生環境・交通環境悪化などの都市問題に対処するために都市計画案が策定された。当時の西欧では膨張する大都市の環境悪を除去し、農村環境に都市機能を併存させる田園都市構想が潮流であり、日本にも影響していると言われている¹⁾。本研究は戦前宮崎県主要3都市の都市計画策定の経緯を関連資料から調査し、宮崎市の都市計画内容から当時の技術者の都市計画に対する考え方や特徴を把握、整理し、現在の都市機能との関係について若干の考察を加えたものである。

(2)都市計画法適用²⁾

わが国の都市計画法は大正8年に制定されたが、宮崎県では昭和2年4月に宮崎市、同3年9月に都城市、同8年11月には延岡市に適用された。宮崎市の適用と同年に都市計画宮崎地方委員会（以後委員会）が設置され、各市町村の都市計画の審議・決定のためほぼ年1回開催された。内務省出身の藤田宗光技師は、第3回委員会（S5）から第7回委員会（S10）まで、委員会主任技師として上記の都市計画策定に携わった。

(3)宮崎市の都市計画³⁾

都市計画区域：第3回委員会（S5）において、当時の宮崎市と隣接する赤江町・檜村の8,086haが宮崎都市計画区域として決定された。委員会で藤田技師は「（都市計画区域決定に際し）目下欧米に台頭しつつある田園都市としての計画に比較し此の範囲が適当」と述べている。1898年（M31）に田園都市構想を提唱したイギリスのハワードは、「32,000人規模の小都市が計画人口まで成長したときは、別々の田園都市を生み出す。そして中央の都市とその周りの小都市で一つの群（社会都市）を形成する」⁴⁾と述べ、一つの群を約25万人規模としている。表1に示すように、宮崎市の都市計画区域の想定人口は253,000人である。計画対象地域の面積規模は異なるが両者の人口規模はほぼ同程度である。このことと後述の理由から判断すれば、藤田技師は田園都市構想の理念に基づいて周囲の集落（檜村・赤江町など）を衛星集落と見立て、これらを都市計画区域内に含めたものと考えられる。

都市計画街路：街路網は第4回委員会（S7）で決定され、昭和9,10年の変更で最終的に39路線、延長99,654mが計画された。その特徴は、橋通線・大淀通線を南北の幹線とし、シビックセンターを中心に放射状の街路網を設け周辺集落と連絡し、その他環状線や縦横路線を配した。これは都心を中心に放射環状線を配し、放射線によって周囲の衛星都市と連絡させるハワードの田園都市の街路網の影響が見られる。

風致地区・公園系統：宮崎では第6回（S9）と第7回委員会（S10）で下北方・宮崎神宮・大淀川・天神山の風致地区が指定された。これについて第6回委員会の理由書では「近時都市の発展に伴い是等景勝の地も動もすれば破壊せらるる傾向ある」と記され、

さらに藤田技師は著書で「都市計画法による風致地区は（都市の）平面的に統制なく膨張することを防止しているもの」としている⁵⁾。つまり、宮崎市では自然破壊・市街地膨張抑止を目

表1. 宮崎都市計画とハワードの田園都市との比較

	宮崎	ハワード
周辺都市を含めた全体面積 (ha)	5,635	26,710
市街地面積(ha)	635	404
周辺都市を含めた想定人口 (人)	253,570	250,000
市街地人口 (人)	64,188	30,000

キーワード：ハワードの田園都市構想、都市計画宮崎地方委員会、内務省技師

連絡先：〒889-2192 宮崎市学園木花台西1-1 宮崎大学工学部土木環境工学科、Tel 0985-58-7343

的に市街地周辺に風致地区を指定したと考えられる。これらの多くは現在も風致が維持されている。また、第7回委員会で藤田技師が「これらの集団地（風致地区・一ツ葉・青島など）を如何なる道路に依って連絡し、且つ公園系統を確立することは重要な問題」としているように、彼は「公園系統思想」を宮崎都市計画に取り入れた。具体的に図2に示すようなルートを策定し、それらはその後の観光ルートにつながる最初の構想であった。

用途地域：用途地域は第7回委員会（S9）で指定された。当時の宮崎新聞（S10.7.19）において「大目標を田園都市に置き商業・工業・住居・未指定の四地区に分けた」⁶⁾とある。実際に市街地中心部から商業地域 住居地域 工業地域と用途が指定され、商業・住宅地域の外縁に工業地帯を配置している田園都市構想の影響が見られる。

当時の商業地域は現在の橋通などの商業地区、住居地域は神宮周辺一帯などの住宅地、工業地域は宮崎港周辺の工業流通地区を形成し、主要な用途指定は現在の都市機能の骨格となっている。なお、当時の未指定地域は現在準工業地域や住居地域となっており、用途の性格の曖昧さが現在の住環境などの問題を顕在化させている地区もある。

(4)田園都市構想との関連

藤田技師は著書で「各都市が田園都市の理論によって構成せられることは最も意義あり...大都市に集中する人口を以て、新都市を建設する議論は権威あるもので、都市計画の一派として、田園都市運動が台頭するに至った」と述べている。さらに、「田園都市は空漠的に市街地に近接して居る田園を指称するものではなく、特別な理論を有し都市生活上衛生的・且つ伝統的理想都市の現出であらねばならぬ」⁷⁾と述べている。藤田技師は、宮崎県において田園都市構想に沿った都市計画を策定することにより、当時各都市が抱えていた衛生環境・交通環境悪化などの都市問題の解決を図ろうとしていたと考えられる。

(5)まとめ

昭和初期の宮崎市の都市計画では、ハワード田園都市構想と人口規模で同程度の都市規模が想定された。この計画は内務省出身の藤田宗光技師が田園都市構想を強く意識して主導した。このことは都市計画地方委員会での藤田技師の発言や著書の内容からだけではなく、以下の計画内容から確認できる。市街地を中心にした放射環状の街路網、市街地周辺に配置された風致地区、各風致地区や緑地帯を街路網によって連絡する公園系統、商業地域を中心に郊外へと住居地域、工業地域と配置した用途地域など、ハワード田園都市的な特徴を保有している。なお、土地利用用途の主要な構造は現在まで継続されている。

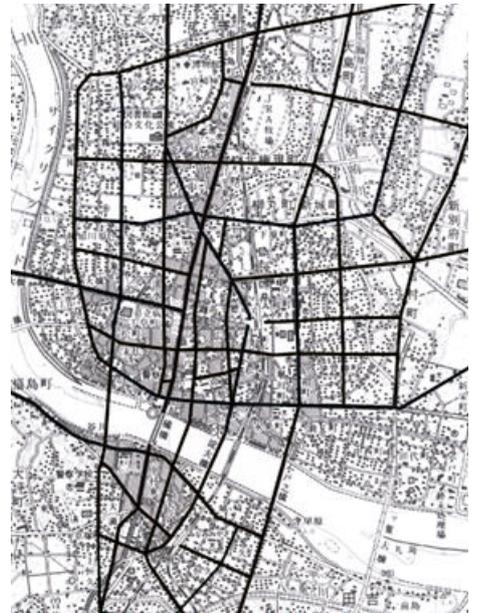


図1. 戦前宮崎都市計画街路網

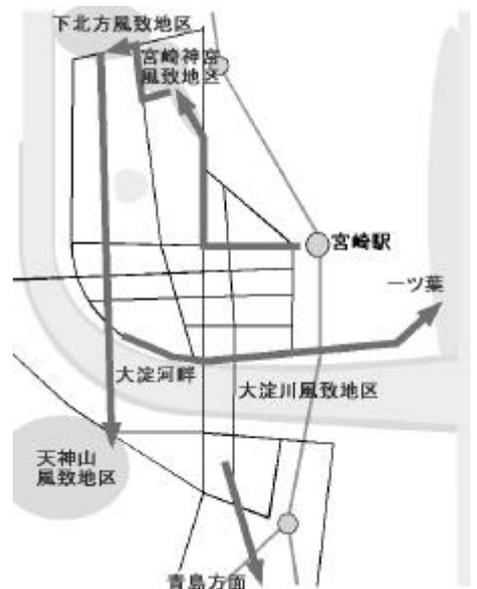


図2. 風致地区・公園系統

<参考文献>

- 1) 田村明：まちづくりの発想，岩波書店，1987
- 2) 3) 第3回～第17回都市計画宮崎地方委員会議事録
- 4) E.Howard 著・長素連訳：明日の田園都市（日本語版），鹿島研究所出版会，pp234～235
- 5) 藤田宗光：都市計画道路工学及国立公園，都市研究会，1935
- 6) 宮崎新聞：「目標は田園都市四地区に分けらる」，1935.7.19
- 7) 藤田宗光：都市計画の理論と設計，淀屋出版，1932